

## 『知は現場にある』 ～ 思い悩まず 旅に出よう～



那覇市医師会 長嶺 信夫  
(e-mail : nagamine1128@yahoo.co.jp)

### 1. 弾性線維腫 探し求めて 3000 里

50 年前のことである。徳島から故郷の沖縄に帰り、琉球大学保健学部附属病院外科に勤務することになった。徳島大学では病理学教室と外科に在籍し、手術材料検査や病理解剖の日々を送っていた。研究対象の人体材料があり、その中に骨・軟部腫瘍があった。当時、鹿児島大学病理学教室に在籍していた坂江清弘博士の弾性線維腫の学位論文があり、鹿児島県奄美大島を中心に収集した 12 症例を対象にした研究に強い刺激を受けていた。

琉球大学では外科に在籍していたものの、やはり病理に愛着を感じていた。病理部の野原雄介助教授の許可を得て、病理台帳を検索したところ、弾性線維腫が 2 例あるのに気付いた。その後の診療で、わずか 1 年で 10 例の弾性線維腫を発見するとともに、家系内発症例や多発発症例が発見された。土曜、日曜日には家系調査のため、県内各地の患者宅を訪ね歩いた。特に興味を引いたのは渡名喜村出身の家系内発症例であった。沖縄本島在住の姉妹の調査のあと、渡名喜島在住の姉妹の調査が必要であった。今では 1,000 屯のフェリーで渡れる島だが、当時はわずか 170 屯の船しかなく、低気圧のため船底で胃液まで吐き出す難儀の末、1977 年 6 月島に渡った。47 年前のことである。その時の予備調査で、渡名喜島で「ぬちながーぐーふ（長寿コブ）」と呼ばれている背部にコブを持つ人が多数存在することが分かった。

数か月後、新聞紙上で、県の渡名喜島検診の日程を見た私は、早速県の医務課に電話、旅費、滞在費自己負担で検診参加の許可を得ることができた。

検診では驚異的な数の弾性線維腫が発見された。当時の住民約 600 名の島で、検診総数 190 名のうち実に 40 人にコブを発見したのである。予備調査を含め、3 回にわたり渡名喜島を訪問、写真撮影や針生検をさせてもらった。

### 2. 宮古、八重山ではコブはないのではないか？

私が渡名喜島を訪問していた時、偶然にも県教育庁の渡名喜島遺跡発掘調査団が来島していた。その中に県考古学会の指導的立場にある名嘉正八郎氏や当真嗣一氏、本土の著名な考古学関係者がいた。

私は、渡名喜島には日本本土はもとより世界的にも極めて稀なコブの症例があり、沖縄本島や奄美大島でも発見されていること、何か民俗学的、形質学的背景があるのではないかと手短かに説明した。私が先島地方は未調査である旨を話したところ、名嘉、当真両氏は「ひょっとしたら先島にはコブはないのではないか」など、言語学的、民俗学的背景から示唆された。また、渡名喜島遺跡発掘調査で、約 3,000 年から 3,500 年前の奄美系の嘉徳 1 式土器が多数発見されたことも教えてくれた。嘉徳 1 式土器はすでに沖縄本島でも多く発見されており、これは沖縄本島、渡名喜島が古くから奄美大島と交流があったことを示していた。

### 3. 先島地方の検診

宮古、八重山での検診を待ち望んでいた私に県医務課から宮古の来間島、大神島の検診の誘いがきた。ところが飛行機に乗り込んだ後、大変な忘れ物に気が付いた。前日準備していた 2 台のカメラを忘れてきたのである。それまで、

... and both infraolecranon areas. Another evidenced tumors in four different locations: subscapular on both sides, left infraolecranon, and right al tuberosity. One patient had tumor in both the scapular and right ischial tuberosity areas; and one patient had tumor located in the infraolecranon alone. (Table 1)

regard to the subscapular involvement, there were cases with growth in both subscapular, 35 in the , and then 22 in the left. Both infraolecranons were ed in 13 cases while those in the left numbered ses. Figures 3 and 4 indicate typical cases.



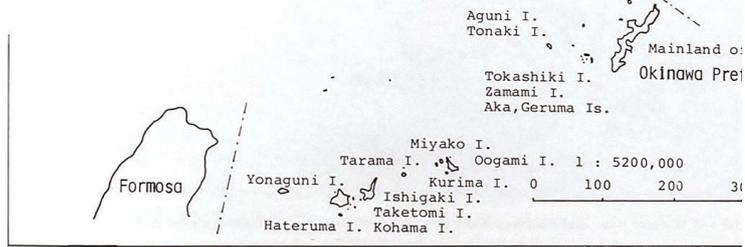
No. 9

ELASTOFIBROMA IN OKINAWA · Nagamine et al.

TABLE 2. Results of Examinations on Okinawa Offshore Islands with Map of Okinawa Islands (Elastofibroma)

Area	Population (March 1981)	No. of Consultation	No. of Patients (EF)	Percent of Patients (EF)
Aguni I.	1197	140	39	27.9%
Tonaki I.	589	190	32*	16.8%
Tokashiki I.	756	102	6	5.9%
Zamami I.	496	108	5	4.6%
Aka, Geruma Is.	273	72	2	2.8%
Motobu-Minna I.	56	35	1	2.9%
Minami-Daito I.	1744	318	2	0.6%
Miyako				
Oogami I.	117	27	0	0%
Kurima I.	252	66	0	0%
Tarama I.	1908	296	1	0.3%
Ishigaki I.				
Omoto district	505	89	0	0%
Kabira district	2136	201	0	0%
Taketomi I.	333	186	2	1.1%
Kohama I.	435	83	0	0%
Yonaguni I.	2101	117	0	0%
Hateruma I.	747	179	0	0%

\* Besides these 32 cases, there were 11 patients with subscapular tumors which were not biopsied.



「CANCER」に掲載された弾性線維腫の論文

コブを発見したら前例写真撮影をしていた。同行の看護婦はカメラを持参しているが、ストロボはついていない。憂鬱な気持のまま検診に臨んだ。ところが、である。大神島でも来間島でもコブは1例も発見されなかった。写真は1枚も撮らずに済んだのである。このことは、名嘉、当真両氏の示唆とともにますます琉球列島における弾性線維腫の分布に興味をいやく結果となった。

その後の検診で渡嘉敷島、座間味島、粟国島では多数の弾性線維腫が発見されたにもかかわらず、先島地方の与那国島、波照間島、小浜島では1例も発見されなかった。これは琉球方言分布や先史文化圏の奄美・沖縄文化圏と宮古・八重山文化圏の区分とみじくも一致したのである<sup>1)</sup>。

4. アメリカ癌協会誌 (CANCER) に掲載

この調査結果は国内医学専門誌<sup>2)</sup>に掲載されたほか、アメリカ癌協会誌 (CANCER) に「Elastofibroma in Okinawa. A Clinicopathologic Study of 170 Cases」の表題で、琉球列島にお

ける分布図とともに12ページにわたって掲載された<sup>3)</sup>。当時、弾性線維腫は全世界で261例の報告があり、このうち私達の症例が170例で全体の65%を占めていた。投稿後、印刷発行までに更に44例の確定診断例を得ていた。この間に私が調査に訪れた島は南北大東島を含め16島、のべ21回に及んだ。

5. 思い悩まず 旅に出よう!

振り返ってみると、私の研究生活の原点は現場にある。研究で暗礁に乗り上げると、そのままでは難破・沈没してしまう。暗礁から離脱しなければならぬ。元来、椅子に座りっぱなしが嫌いな私は、旅に出る。思い悩んだ答えは現場にあった。現場は嘘をつかない。素直にその結果を受け入れるほかない。結果がネガティブであれ、それが真実である。思いもよらぬ答えが返ってくる。

6. 迷ったら現地に赴くこと!

チベット高地における血中酸素飽和度の測定にしても、旅行者に比較し現地のチベット人は



標高 5,200m に位置するチョモランマ・ベースキャンプ (2017 年 5 月筆者撮影)

高地に順応することで酸素飽和度が高く出るのではないかと予想したが、旅行 9 日目の測定結果は予想に反して測定値に大差がなかった。当初、その結果をどう解釈すべきか途方にくれた<sup>4)</sup>。その後の研究で旅行者が高地の環境に順応することによって、短期間で酸素飽和度が上昇、改善することが新たに判明した<sup>5, 6)</sup>。机上で答えを待つのではなく、現地に赴くことで新たな真理を得ることができた。

標題の『知は現場にある』は光文社新書の《しおり》に記載された言葉である。



チベットのヤクは赤い服の前でもおとなしく、お釈迦様の教えをよく守っています。  
(チョウ・オユー・ベースキャンプにて、2011 年 5 月筆者撮影)

## 文献

1. 長嶺信夫：コブとりじいさん漫遊記 那覇市医師会報 初夏号：26-29,1986
2. 長嶺信夫ほか：沖縄における弾性線維腫の分布調査と家系内発生例について 臨床整形外科 17 (3)：196-203,1982
3. Nobuo Nagamine et al：Elastofibroma in Okinawa. A Clinicopathologic study of 170 Cases. CANCER 50 :1794-1805,1982
4. 長嶺信夫：チベット高地における血中酸素飽和度について 日本人旅行者およびチベット人の興味深い測定結果 沖縄医報 Vol.47 No.10：94-97, 2011
5. 長嶺信夫：チベット高地における血中酸素飽和度について 第 2 報 高度順応で酸素飽和度が上昇 沖縄医報 Vol.53 No.9：75-78, 2017
6. 長嶺信夫、長嶺小緒里：北インド・ラダック地方における血中酸素飽和度について 沖縄医報 Vol.59 No.12：34-35, 2023